

博士学位論文（東京音楽大学）
Doctoral Thesis (Tokyo College of Music)

氏名	鈴木 亜矢子
フリガナ	スズキ アヤコ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博第2号
学位授与年月日	平成29年3月18日
学位授与機関	東京音楽大学
学位論文題目	山田耕筰・別宮貞雄・團伊玖磨の日本歌曲 ——アクセント理論を起点とした分析的研究——

Name	Suzuki, Ayako
Name of Degree	Doctor of Musical Arts (D.M.A.)
Degree Number	Haku-no.2
Date	March 18, 2017
Grantor	Tokyo College of Music, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	Japanese songs by Kosçak Yamada, Sadao Bekku and Ikuma Dan : An analytic study based on the accent theory

山田耕筰・別宮貞雄・團伊玖磨の日本歌曲 ——アクセント理論を起点とした分析的研究——

鈴木 亜矢子

要旨

本論文の目的は、山田耕筰（1886-1965）を日本における西洋音楽受容期の重要な作曲家として捉え、山田と山田以降の日本歌曲の中の詩と音楽の作曲法を検討し、その特徴を明らかにすることである。そのために、まず山田の提唱した歌曲と詩のアクセントに関する理論が作品の中でどう実現されているかを、山田と次世代の作曲家、すなわち別宮貞雄（1922-2012）と團伊玖磨（1924-2001）の作品について分析方法を明示した上で検討し、次に詩のアクセント以外の観点から各作曲家の日本歌曲における創作の特徴を探求する。なお、対象とする作品はピアノ伴奏による独唱歌曲作品である。

山田の歌曲創作理論研究についての先行研究には今田 2003 に代表される山田礼賛型の論、井上 2001 に代表される團伊玖磨など同時代の他の作曲家との比較論、大元 2013 に代表される、理論への疑念を呈する反論的研究などがある。これらの研究の論点は、山田が考案した「詩のアクセントに関する理論」（本論文においては、以後「アクセント理論」と呼ぶ）、つまり日本語の高低アクセントと歌曲の旋律の高低を一致させるという理論が作品の中で実践されているかどうかという点に集中する傾向があり、なかでも童謡《赤とんぼ》がしばしば議論の中心とされてきた。これらの先行研究を概観すると、次の2つの問題点が指摘できる。すなわち、全歌曲作品について網羅的に分析した上で語られた論がないという点と、「アクセント理論」が実践されているかについてのみ論点が集中しているという点である。そこから本論文では、全作品を対象にアクセントとの関連のもとで分析することを課題とし、次の仮定2点に基づき考察を行う。

仮定 1 アクセント理論以外にも日本語詩のための作曲法があったのではないか

仮定 2 日本歌曲創作理論は山田の次世代以降で変化しているのではないか

山田のアクセント理論は精密に体系化されたものではないが、ここでは可能な限り客観性を保つ分析法を示し、詩のアクセントと旋律の整合性を数値化して示すこととする。

アクセント理論と分析方法を明示した上で、対象の3名の作曲家の全作品の特徴と傾向を考察した。対象作品数は、山田耕筰が134作品（1910-1959年）、別宮貞雄が48作品（1947-1983年）、團伊玖磨が67作品（1942-2000年）の計249作品である。

分析の結果、詩と音楽の作曲法において三者三様の異なる様相が見られた。まず、各作曲家の作品のアクセント理論との平均一致率を年代ごとに示し、時期区分を試みた。作品全体のアクセント平均一致率（%）は山田が52%、別宮が80%、團が59%と、3名の作曲

家の値に大きな違いが見られた。また、一致率の推移と言説の関係をみると、山田はアクセント理論を提唱し、首尾一貫してその理論を主張したにもかかわらず一致率は約 5 割であり、言説と実際の作品の間に不一致がみられる。別宮はアクセント理論を肯定する言説を残し、その一致率も最も高かった。團は前期には山田の理論を肯定したが、後期には否定的になり、実際の作品における一致率も減少している。

また、二つの仮定について考察した結果、別宮・團は各々異なる形でアクセント理論以外の作曲法を試み、アクセント理論を出発点として歌曲創作理論についての模索が展開されていったと結論づけられる。その主な方法は以下の 3 点にまとめることができる。

1. recit. parl.などの語りの指示とピアノの休止
2. シラブルの等拍性
3. 同音反復

この中で山田が多く用いたのは、2（シラブルの等拍性）のみである。これに対して別宮は全期にわたって2の方法を用い、さらに後期には1（語りの指示）を用いるようになった。團は2と3（同音反復）を後期に多く用いた。

このように時間の経過とともに作曲法の幅が広がっていく中で、別宮と團のアクセント理論に対する姿勢が反対であったことは注目に値する。別宮はアクセント理論を肯定し、新しい作曲法を加えてもアクセント理論への忠実さは保ったのに対して、團は後期にはアクセント理論を否定し、新しい作曲法を用いる中でアクセントの一致率は下がっていった。

すなわち、山田がアクセント理論の提唱者とする、別宮と團にとってアクセント理論は出発点であり、それぞれが理論を守り、あるいは逆らう中で、さらに異なる日本語詩への作曲の工夫を加えていったといえることができる。以上の研究の課題と仮定について得られた考察は山田、別宮、團の3名の歌曲作品の特徴と彼らの個性を示す結果ともなり、本論文における目的の解答となり得た。

対象の作曲家の全作品についてアクセント分析をしたことにより、本論文では各作曲家の理論への一致率を数値化して示し、さらに年代との関係から傾向の変化を明らかにすることができた。明確な分析法に基づくアクセント分析を行ったことにより、3人の作曲家の違いを明瞭に示せたことは、この分析方法がさらに他の作曲家や作品でも有効に用い得るものであることを示していると言えよう。